Japanese Association of Supportive Care in Cancer
日本がんサポーティブケア学会 ニュースレター
News Letter No.6
2023.1
一般社団法人 日本がんサポーティブケア学会
Tel: 03-5422-3447 Email: jascc@jascc.jp
URL: http://www.jascc.jp

目次

第7回(2022年)学術集会を終えて …… 2
宇和川 匡 (第7回学術集会大会長 東京慈恵会医科大学附属病院 腫瘍センター センター長)

最優秀演題賞受賞を受賞して …… 3
秦 明登 (神戸低侵襲がん医療センター 呼吸器腫瘍内科)

優秀演題賞を受賞して …… 3
菅原 充広 (北里大学薬学部／北里大学病院薬剤部)

第8回(2023年)学術集会に向けて …… 4
齊藤 光江 (第8回学術集会大会長 順天堂大学医学部 乳腺腫瘍学講座)

Exercise Oncologyワーキンググループ設立のご報告 …… 5
高野 利実 (学術企画委員会 委員長 がん研有明病院乳腺内科)

Stroke Oncologyワーキンググループ設立のご報告 …… 6
高野 利実 (Stroke Oncology WG長 がん研有明病院乳腺内科)

2022年発刊「がん支持医療テキストブック サポーティブケアとサバイバーシップ」質の高いがんサポーティブケアの均てん化を目指して …… 7
渡邊 清高 (教育委員会 委員長 帝京大学医学部内科学講座 腫瘍内科)

編集後記(広報・渉外委員会 委員長) …… 8
宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学附属病院 腫瘍センター センター長)

第7回(2022年)学術集会を終えて

宇和川 匡　(第7回学術集会大会長　東京慈恵会医科大学附属病院　腫瘍センター　センター長)

第7回学術集会が2022年6月18-19日の２日間にわたり下関海峡メッセ（山口県）で開催された。新型コロナウィルス感染症の猛威により、青森で開催された第4回学術集会（佐藤温先生会長）以来、実に3年ぶりの対面での学術集会となった。

東京オリンピック2020（2021年開催）後からの新型コロナ感染者数の減少もあり、完全対面形式での会場開催を目指して準備を進めていたが、年明けからのオミクロン株の猛威（第６波）により、ニュースでは連日増加する感染者数が報道され、誰よりも毎日の感染者数に一喜一憂していたことが思い出される。個人的に対面式での会場開催への強いこだわりがあり、急遽ハイブリッド開催に変更することで対応した。幸運にも会期中は天候にも恵まれ、多くの方々とモニター越しではなく直接の挨拶を交わすことができた時には、現地開催が実現できた喜びを痛感した。また予想以上に多くの方々を現地にお迎えすることができたことは二重の喜びとなった。プログラム委員会、学術企画委員会を含む多くの皆様のサポートのおかげで素晴らしいプログラムになったと自負している。そのおかげで1,100名を超える参加者、指定演題・一般演題合わせた240題もの発表をいただいた。

会長特権として２つの企画をおこなった。一つは『日本腫瘍循環器学会(JOCS)とのコラボレーション企画』で、JASCCとJOCSはいずれもがん支持医療という共通のテーマに向かう比較的新しい学会であり、この両学会がタッグを組むことは今後のがん支持医療の発展に必ずや貢献するという信念のもとに企画した。

もう一つは『外科医ならではのサポーティブケア』である。現状ではJASCC会員の中で外科医は少数派であるが、がんによる消化管閉塞に起因した苦痛に対するバイパス手術など、外科的ながん支持医療の認知度アップと、外科医をがん支持医療に引き込みたいという考えから企画した。いずれの企画も多くの方に参加いただけた。第7回学術集会の閉会をもって、大崎昭彦先生（第６回会長）から受け取ったバトンをなんとか齊藤光江先生（第８回会長）へお渡しすることができ、アドレナリンが正常値に戻った。

このような機会を与えてくださった会員の皆様に感謝すると共に、本学術集会を支えていただいた全ての皆様に心より御礼申し上げる。

最優秀演題賞受賞を受賞して

秦 明登　(神戸低侵襲がん医療センター　呼吸器腫瘍内科)

2022年6月にハイブリッド形式で開催されました第7回日本がんサポーティブケア学会学術集会にて最優秀演題賞という栄誉ある賞を頂きまして身震いする思いでございます。

今回、「高度催吐性抗悪性腫瘍薬（シスプラチン）投与患者を対象としたFosnetupitantの第III相二重盲検比較試験：CONSOLE」の演題名で発表させて頂きました。
Fosnetupitant（FosNTP）は半減期が約70時間と長いNK1受容体拮抗薬であり、血管痛の軽減、超遅発期（通常遅発期とされる120時間を超えた168時間まで）でのCINVの軽減が期待されます。本試験では主要評価項目である全期間のCR率のFosaprepitant（FosAPR）に対するFosNTPの非劣勢が証明され、FosNTPはNK1受容体拮抗薬の選択肢の一つとなりました。また統計学的手法を修正した場合には0-168時間の全期間のCR率はFosNTP群73.2%、FosAPR群66.9%で統計学的有意差を認めました。注射部位反応に関しては、有害事象として11.0%、20.6%、副作用として0.3%、3.6%とFosNTP群で有意に低頻度でした。臨床的にもFosNTP（アロカリス®）はデキサメサゾンおよびパロノセトロンと混注して30分で投与可能であり、その利便性が期待されます。

本試験は多施設共同試験であり、幸運にも当院の症例登録数が最多であったため、今回の発表およびJournal of Clinical Oncologyにfirst authorでpublishさせて頂く機会を頂きました。試験に関わったスタッフ、参加頂いた患者さん、すべての方々に心より御礼申し上げたいと思います。
（余談ですが、本学会のポスターでは角島に延びる角島大橋の写真が大きく載っています。実は私は豊浦町（現下関市の一部）の生まれで母の実家が角島にあります。幼少の頃、現在は角島大橋の袂になっている海岸付近でよく泳いだものです。学会後もレンタカーで久しぶりに祖母の家を訪ねることができました。この地で行われた本学会でこのような賞を頂き、たいへん感慨深いものがございました。）

優秀演題賞を受賞して

菅原 充広　(北里大学薬学部／北里大学病院薬剤部)

この度は栄誉ある第７回 学術大会優秀演題賞をいただき大変光栄に存じます。
SPARED trialは聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学講座の伊澤直樹先生が代表を務められる研究グループで、医師・薬剤師が主導となって実施しているプラセボ対照二重盲検ランダム化第Ⅲ相比較試験です。本試験ではCDDPベースの化学療法を受ける患者に対して、NK1-RA、PALO、オランザピンを併用した場合の遅発期の完全奏効率においてDEX sparing（Day1のみ(D1群) v.s. Day1 – 4（D4群））の非劣性（主要評価項目）をすでに報告しております。今回は本試験の副次評価項目である「患者報告アウトカムから、QOLと有害事象の関連」について発表させていただきました。結果として、EORTC QLQ-C30のGlobal Health Statusおよび悪心・嘔吐のスケールに差はありませんでしたが、食欲不振はD1群で悪化していたこと、D1群はD4群と比較して悪心・食欲不振の発現頻度は高頻度でしたが、OLZを追加することにより、DEX sparingをしても不安感や疲労感は増加しないことを報告いたしました。
本研究では10のご施設、281名の患者様にご参加いただきました。また、今回の発表に際し、研究チームメンバーの先生方からのご指導・ご支援いただいた結果、このような素晴らしい賞をいただけたものと感じております。この場をお借りして、参加いただいたご施設で本研究に携わられた先生方、患者様・ご家族の方々、研究チームのメンバの先生方に御礼申し上げます。
また、このような形で本研究をご評価いただきました学会関係の先生方に改めて御礼申し上げます。

第8回(2023年)学術集会に向けて

齊藤 光江　**(第8回学術集会大会長　順天堂大学医学部　乳腺腫瘍学講座)**

思い起こせば2017年大宮で開催された第2回JASCC学術集会の最終日に、国際がんサポーティブケア学会（MASCC）から招へいされたOlver先生と共に、MASCC/JASCCの合同学術集会を日本で開く可能性を探り、候補地である横浜を視察したことから始まりました。まだ更地だったパシフィコ横浜ノースを早々仮予約した日です。佐伯理事長のご厚意で大宮から車を出していただき、大崎先生もお付き合いくださいました。翌年ワシントンで開かれたMASCCの会期中には、夜間に横浜との交渉を、日中には会場で打ち合わせを繰り返し、ほぼMASCC側が容認できる条件に修正が整い、COVID-19感染拡大に突入するまでは、合同学会は2021年に横浜で開催する計画でした。結果的に2020年の開催を断念したMASCCスペイン大会は2021年に延期になり、しかもバーチャル開催、日本での合同開催は2023年に延期になりました。会場の変更も余儀なくされ、新たに全国に候補地を求め、奈良県に新たに建設が決まった今回の会場との出会いは運命的なものだったかもしれません。かつて疫病からの復興を願って建立された大仏殿を有する古都は、正に現代の疫病の鎮静を願って待つ祈願の合同学会に因縁のようなものを感じました。

2022年に入り、MASCCの20のstudy groupとJASCCの17部会は、当初のためらいを乗り越え、皮膚、粘膜、栄養、がんリハ、チーム医療、オピオイド、高齢者、小児、制吐療法など10以上の共通テーマでプログラムを練り、積極的に協働が始まりました。また両学会大会長のOlver先生と齊藤とは、医療格差、伝統医学、医工連携といった３つのプレナリーセッションを合同企画し、両学会の交わりの部分を大切にするという、まさに合同学会らしい開催を目指して、準備の進捗管理や運営の協議に入りました。一方で、MASCCとの交わりとは別個に、純粋に第8回JASCC学術集会の部分に関しては、恒例の部会単位でのポスターセッション（e-poster）やYear in review、JASCCで作成したガイドラインやガイドの紹介などJASCCならではの企画は大事にしつつ、多様性のあるプログラム委員（患者や企業、行政官も含め、ジェンダーバランスの取れた構成）から企画立案、そして提案された10以上の特別セッションが採択されています。JASCCで新たに発足させる認定制度の紹介やExercise Oncology、Patient Public Involvementなどがん対策基本法に新たに組み込まれる課題も含み、支持医療の普及と、向上への意気込みを感じて頂ける企画になったのではないかと思います。

折角の国際学会を演題登録も含めて英語でという方はMASCCのHPから、演題は日本語でという方はJASCCのHPから、お入りください。参加登録に関しては、MASCC/JASCCすべてに参加できるカテゴリーと、JASCCのみへの登録をご用意しております。古都奈良にあって、よりよい未来を創造する「がん支持医療の温故知新」というテーマを掲げ、時間軸と世界の広がりという4次元が体感できる学術集会になるよう、更に準備を進めてまいります。関係者一同、久方ぶりの完全現地開催で多くの皆様のご参加をお待ち申し上げております。

Exercise Oncologyワーキンググループ設立のご報告

高野 利実　**(学術企画委員会　委員長　がん研有明病院乳腺内科)**

2022年10月25日の理事会にて、「Exercise Oncology（運動腫瘍学）ワーキンググループ (WG)」の設立が承認されました。このWGは、学術企画委員会のもとに位置づけられ、順天堂大学静岡病院リハビリテーション科の田沼明先生がWG長に就任しました。
Exercise Oncologyとは、がん予防、がん治療、がんリハビリテーション、緩和ケア、がんサバイバーシップケアにおいて、身体活動や運動が、生活の質（QOL）や治療効果などのアウトカムに与える影響を評価し、適切な身体活動・運動を「処方」することを目指す、新しい学問分野です。

がんサバイバーを対象とした、身体活動・運動の研究は盛んに行われ、その有用性も示されています。日本で間もなく完成予定の、「がんサバイバーシップガイドライン　身体活動・運動編」でも、がんサバイバーに対する運動の有用性について言及される見込みです。日本国内でも、がん患者やがんサバイバーに対する運動介入の臨床試験が行われており、この領域への関心は高まりつつあります。週刊医学界新聞2022年9月5日号（医学書院）では、Exercise Oncologyが特集されました。

The Multinational Association of Supportive Care in Cancer (MASCC)では、Survivorship Study Groupの中に、Exercise OncologyのSubgroupが設立され、MASCC/JASCC Annual Meeting　2023では、Exercise Oncologyのセッションも企画されています。今後は、MASCCのSubgroupと本WGとの連携による国際的な展開もできれば、と考えています。

本WGは、関連の深いがんリハビリテーション部会やサバイバーシップ部会と密接に連携しながら進めていくことになります。医学界新聞で特集されて以降、全国の多くの医療関係者から、この領域に関心があるという声をいただき、新たな企画提案もいただいています。これまでも「運動」と「がん」をめぐる取り組みは様々な形で行われており、「新しい学問分野」と言われることに違和感を覚える方もおられるかもしれませんが、Exercise Oncologyとして、限定した定義をするものではなく、既存の取り組みも含め、「運動」と「がん」をめぐる様々な可能性を共有するプラットフォームとして、この領域が発展することを願っています。

私自身は、本WG設立に関わった一人として、この領域に関心を持つ皆様の想いを受け止めながら、うまく交通整理をできれば、と思っております。これから、様々な化学反応が起きそうな予感もあり、とてもワクワクしております。多くの皆様のお力添えをいただければ幸いです。

Stroke Oncologyワーキンググループ設立のご報告

高野 利実　(Stroke Oncology WG長　がん研有明病院乳腺内科)

2022年10月25日の理事会にて、「Stroke Oncology（腫瘍脳卒中学）ワーキンググループ (WG)」の設立が承認されました。既存のOnco-nephrology WG、Onco-cardiology WGと同じく、Oncology emergency部会のもとに位置づけられ、高野がWG長に就任いたしました。

「がん」と「脳卒中」は、ともに、日本人の死因の上位を占め、両者の合併例も多くみられています。偶発的に合併する場合も、一方が他方の原因となっている場合も、共通の発症危険因子が関与している場合もあると考えられます。がんの治療経過中に突然脳卒中を発症する場合もあり、脳卒中を契機に未診断のがんが見つかることもあります。脳卒中に対する治療やがんに対する治療が進歩しているにもかかわらず、専門分化した医療の中では、専門外領域の進歩についての知識が十分に共有されておらず、脳卒中を発症したがん患者に対して適切な急性期治療がなされなかったり、脳卒中治療やリハビリが優先されて適切ながん治療がなされていなかったりするケースもあるようです。

がんと脳卒中の合併例に対して適切な治療を行うためには、二つの領域の専門家が問題意識を共有し、膝を交えて議論する場が必要であると考えられ、2020 年、日本脳卒中学会に「Stroke Oncology に関するプロジェクトチーム(PT)」が設置されました。このPTには、脳外科医、神経内科医、リハビリテーション医に加えて、オンコロジストとして高野が参加しています。2020年以降、このPTメンバーを中心に、多くの学会でシンポジウムを行い、Stroke Oncologyに関する問題提起と議論を行ってきました。JASCC2022においても、日本脳卒中学会とJASCCの合同企画セッション「脳卒中合併がん患者のケアと治療と連携のあり方　～Stroke Oncologyの確立へ～」で、活発に議論が行われました。

これまでのStroke Oncologyの活動は、脳卒中診療医主導で進められていましたが、これからは、オンコロジスト側からの積極的な関与も必要であり、本WGがその役割を担うことになります。

本WGでは、新たな学問領域としてStroke Oncologyを確立し、がんサポーティブケアとして、脳卒中合併例に対する適切なケアを確立することを目指します。まずは、がん患者における脳卒中発症リスク因子探索の研究に取り組む予定です。本WGは、日本脳卒中学会のPTとも密接に連携をとり、活動を展開する予定で、副WG長として、同PTから河野浩之先生（杏林大学医学部脳卒中医学）に参加していただきます。この新しい学問分野の発展にご期待ください。

2022年発刊
「がん支持医療テキストブック サポーティブケアとサバイバーシップ」
質の高いがんサポーティブケアの均てん化を目指して

渡邊 清高　(教育委員会　委員長　帝京大学医学部内科学講座 腫瘍内科)

2022年10月に「がん支持医療テキストブック サポーティブケアとサバイバーシップ（The JASCC Textbook of Cancer Supportive Care and Survivorship）が発刊されました。がんに対する治療（がん治療）とがんによる心身の異常やがん治療に伴う有害事象の管理やケア （支持医療）の密接な連携 ・統合とそれを可能とする仕組みが求められています。このテキストは、がん診療に関わる多職種からなる本学会の専門家が、支持医療に必要な知識 ・技能 ・態度を得るとともに、がん治療やケアに携わる施設において質の高い支持医療を実施できる体制整備（施設の整備・人材育成・マニュアルの作成・研究の推進）に向けて構想されました。田村和夫前理事長の強いリーダーシップのもと、2020年にがん支持医療テキストブック編集委員会が発足し、このJASCCテキストブックの作成により、エビデンスに基づく支持医療の標準化・均てん化を目指す方向性が示されました。がん診療にかかわる医療者が必要とする支持医療の基礎的な知識と技術を学ぶための基盤となるテキストと位置づけ、以下の基本型な方針が合意されました。

1)エビデンスに基づく支持医療の提示：JASCC各部会・ワーキンググループで作成されたガイドラインなどエビデンスに基づく支持医療を可視化する
2)チーム医療の実践：多職種の視点や関わりをトピックごとに示すことで、多職種携 ・地域包括ケアにおいて、がん経験者 （サバイバー）が安心して暮らすことができるときに有益な情報を提示する
3)今後の支持医療研究の方向性：現状の到達点とクリニカルクエスチョン・リサーチクエスチョンを併せて提示することで研究の方向性を示す

内容は総論と各論の2部構成とし、総論では、がん治療に携わる医療者すべてが知っておくべき平易な内容とし、各論では個別のトピックについて深く取り扱うものとしました。総論の編集委員長は渡邊が担当し、各論の編集委員長は石黒洋先生（埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科）が担当されました。複数のメディカルスタッフにより、独自の視点からがん支持医療への関わりをご紹介いただいています。

総論では、がんの自然史から始まり、がんが体に及ぼす影響（食思不振、がん疼痛）、QOL、支持医療のアプローチ （内科的治療 ・放射線治療 ・外科的治療・精神科的治療・骨転移と骨の健康、リハビリテーション、栄養療法、東洋医学的治療[漢方・鍼灸]、補完代替療法）について扱っています。がんと喫煙、チーム医療、小児・AYA 世代、高齢者、サバイバーシップ、就労・経済的支援、患者アウトカム （PRO）、がん治療と緩和ケアの統合、抗がん薬曝露対策、がんゲノム、そして支持医療研究など幅広いテーマを扱いました。各論では高次機能・認知情動、皮膚障害、感覚器（聴覚・嗅覚、末梢神経障害など）、歯科口腔、消化器、心・血管・リンパ、呼吸器、泌尿・生殖器、がんと生殖医療、内分泌・代謝、血液、感染症 （発熱性好中球減少症など）、自己免疫疾患・免疫関連有害事象、腫瘍随伴症候群、腫瘍緊急症・オンコロジーエマージェンシーなど、幅広くがん治療に伴う課題について取り上げています。

企画段階から、理事会、評議員会などでご意見お伺いしながら準備させていただき、部会長・WG長を通して、JASCC内の各部会、WGの皆さまにご執筆、ご査読いただきました。質の高い支持医療の均てん化には、支持医療に精通する医療人、指導者の育成が必須です。JASCCテキストブックは人材育成に向けた教育ならびにがん支持医療に精通する医療人の認証に向け研修ツールとして活用されるべく、佐伯俊昭理事長、高松泰将来構想委員会委員長（福岡大学腫瘍・血液・感染症内科）、そして教育委員会などで議論がなされています。ぜひご活用いただき、ご意見ご提案ございましたら、お気軽にお寄せください。

がん支持医療テキストブック
サポーティブケアとサバイバーシップ
編集：日本がんサポーティブケア学会
発行：金原出版
定価：4,400円（4,000円+税）
発行日：2022年10月14日
ISBN：978-4-307-20443-9
B5判・304頁

編集後記

新型コロナウィルス感染症との共存の時代に突入し、第7回学術集会は実に3年ぶりの対面形式の学術集会開催（ハイブリッド形式）が開催されました。そして2023年に開催される第8回学術集会（学会長　齊藤光江先生）はMASCCとの共同開催となり、JASCC学術集会のひとつの節目を迎えます。是非とも会員の皆様で盛り上げていただきたいと思います。
今年もJASCCから様々な作成物が公表されました。中でも『がん支持医療テキストブック』は、正しいがん支持医療の実践ができる医療人の育成におけるバイブルです。是非ご活用ください。

JASCCは更なるがん支持医療の発展のために、新たな委員会・ワーキンググループを設立し、留まることなく進化し続けています。MASCC設立から25年遅れで誕生したJASCCですが、その差がみるみる縮まっていることを実感するのは私だけではないと思います。

広報・渉外委員会